

第5回大阪ミモザカフェ：総学 F1 分科会のふりかえり、交差性

12/25 クリスマスの夜にオンラインで大阪ミモザカフェを行いました。7 人の参加があり、大阪のほか岡山、京都、東京、群馬から、また男性の参加もありました。簡単な自己紹介をしてから、12/7 開催の総学の F1 分科会（フェミニスト・エスニック・スタディーズと DEI (Diversity, Equity, and Inclusion) : 平和に必須の多様性と公平性と包摂）の感想からおしゃべりを始めました。F1 分科会の大きなテーマは複合差別や交差性でしたが、民族差別がまだあること、コリアン女性の母の学校選びでの躊躇、フィリピンの英語講師の差別構造、管理栄養士の男性の経験など、分科会での印象に残った報告から話が広がりました。“差別がまだある”ということに対して、同じ事象を見ていても、自分がマイノリティの立場かマジョリティの立場かで見えているもの、見えかたが違うことにも気づかされました。

F1 分科会は、JSA のポリシーである“市民と科学者をつなぐ”を意識し、報告者も参加者（聴衆）も半分は“市民”の方となるように企画者が工夫とケアを丁寧に行って企画運営されました。こうした企画は研究者だけで構成するほうが“楽”で、そうしてしまいがちですが、今後の企画の立て方も考えていかなければと思います。そうした背景のためか、分科会の質疑で質的研究や自分の研究分野ではない研究の方法論への理解や尊重がない人がいたことが議論となりました。JSA に多い理系研究者の傾向かもしれませんが、学術誌でもそうした理解のない査読者によるリジェクトなどもよくあり、悩ましい問題です。これは、“研究分野の交差性”や“研究者と市民の交差性”の課題でもあります。とある理系研究室での毎週のディスカッションの場で、「その研究意味あるの？」といった歯に衣着せぬやりとりがなされるエピソードから、それはマッチョカルチャーでは？との指摘もありました。また別の場では、男性が多い環境に女性が入ってくることによって雰囲気が変わったというところもあるようです。

職場での人間らしく働ける環境こそ大事だという話から、派遣労働や不安定雇用の女性が困ったことがあっても辞めるしかなく、女性労働者という枠組みだけでは非正規雇用の女性の声が聞こえづらくなる、ということから“不安定雇用の交差性”も指摘されました。交差性という概念は、マイノリティ属性（民族、障害など）の理解だけでなく、自分の加害性にも気づかされます。日本人であること、都市に生活していること、男性であることなどの“特権”を自覚していくことの難しさがあります。分科会の質疑は、悪気がなく自分が正しいと考える研究方法や研究者としての価値観からの発言だったかもしれませんが、その発言の加害性を自覚しづらいことがとても厄介です。大学でのハラスメント研修も話題となり、学生指導でも言うべきことは言わねばなりません、相手に届くやり方でなければいけません。研究者や大学教員もまた、意図せず加害をしてしまいやすい立場であることを改めて感じました。

また、江戸時代は男女対等であったのに明治に入ってから女性が家族制度で下位に位置付けられ、そうした状況にも階層性があったのでは？との指摘から、“階層性の交差性”もある…など、複合差別や交差性を手がかりに話が広がった 1 時間半でした。

次回 1/25 は大阪支部のニューイヤーカフェ企画（憲法カフェ）に合流することにいたしました。対面参加またはオンラインのハイブリッドで皆さまにお会いできればと思います。